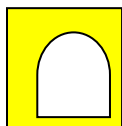


日吉台地下壕保存の会会報



第135号

日吉台地下壕保存の会

じりっ

而立の年に

会長 阿久沢 武史

会員の皆様のご理解とご協力に支えられ、今年も総会の日を迎えることができました。まずはこの場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。誰から頼まれたわけでもなく自主的に参加し活動する市民の会として、30回目の総会を開くことができたことに驚きを感じるとともに、将来に繋げていかなければならない責務を感じます。

『会報』第1号(1989年5月10日発行)は、当時会長をされていた永戸多喜雄先生の「会長挨拶」から始まっています。

慶應義塾の教職員有志、空襲下の日吉で生きた人々、旧海軍関係者、地域で子供たちの教育にたずさわる教師たち、きわめて穏和だが、平和への熱い想いを胸に秘めた周辺の市民が、一つの目的のために、この会を結成したこと自体、数年前に地下壕調査を思い立ち、細々と活動を続けてきた私たちにとっては、当初は夢にも考えなかった劃期的な出来事です。そして会の結成が劃期的であればあるほど、会に加わる私たちの責任は重いのだと言わなければなりません。

この「きわめて穏和」だが「平和への熱い想いを胸に秘めた」人々の集まりは、そのまま30年間変わることなく私たちの会の気風となりました。空襲下で生きた人々、旧海軍関係者からの聞き取りを地道に今も続け、教育以外のさまざまな仕事を経験した人たちが「戦跡ガイド」というチームを作り、地域の子供たちや若者たちの平和教育に寄与しています。私たちの語りかけは、いまや修学旅行や平和学習で訪れる県外の児童・生徒にまで広がっています。こうした活動の原動力になっているのは、「きわめて穏和」な「平和への熱い想い」に他ならないと思います。

総会に先立つ記念講演会では、白井厚先生にご講演いただきました。会の発足以来、良き理解者としてサポートいただき、支え続けてくださった方です。30回という節目を迎え、これまでの活動を見つめ直し、将来に向けて確かな一歩を踏み出したいという思いから、白井先生に特に講師をお願いしました。

総会の日朝の新聞(『朝日新聞』朝刊)に、カンヌ国際映画祭で最高賞を受賞した是枝裕和監督が文部科学大臣からの祝意を辞退するという記事がありました。是枝監督は自身のサイトで次のような考えを示しているとのことでした。

映画がかつて、『国益』や『国策』と一体化し、大きな不幸を招いた過去の反省に立つならば、大げさなようですがこのような『平時』においても公権力(それが保守でも

目次

巻頭言	而立の年に	会長 阿久沢武史	1-2p
お知らせ	第22回戦争遺跡全国シンポジウム愛知豊川大会		2-4p
報告	第30回日吉台地下壕保存の会定期総会		4-8p
新聞記事	講演会：慶大白井名誉教授 横浜で講演		9p
報告	講演会：「大学と戦争」か・ら・思・う・こ・とを聴いて		10-11p
報告	公開講座を聞いて(日本の戦争遺跡の調査研究と保存運動)		12p
報告	2018年第12期ガイド養成講座修了しました		12-13p
連載	地下壕設備アレコレ【22】		13-14p
お知らせ	港北図書館でパネル展&講演会を開催		15p
報告	第23回2018平和のための戦争展 in よこはま		15p
活動の記録	(4~6月)		16p

リベラルでも）とは潔く距離を保つというのが正しい振る舞いなのではないかと考えています。

この「潔さ」や「振る舞い」は、「きわめて穏和だが平和への熱い想いを胸に秘める」という態度と根底でつながるだろうと思います。私たちが次の10年に一步を踏み出す気構えとして、常に「正しい振る舞い」の「正しさ」とは何かということを心に留めておく必要があると思います。

「子曰く、吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。」（『論語』）三十歳は「而立」の年です。強いものに寄りかからずに、自らの足でしっかりと立つこと、節目のこの機会に、まずはその気概を確認しておきたいと思っています。

お知らせ

第22回 戦争遺跡保存全国シンポジウム愛知豊川大会 大会テーマ『戦争遺跡の保存活用と次世代への継承』 － 愛知の戦争遺跡の調査・保存運動とその成果 －

【主催】第22回戦争遺跡保存全国シンポジウム愛知豊川大会実行委員会
戦争遺跡保存全国ネットワーク

【後援】豊川市 豊川市教育委員会
読売新聞中部支社 朝日新聞社 東海日日新聞社 東愛知新聞社 中日新聞社

1. 大会趣旨

今年の戦争遺跡保存全国シンポジウムは愛知県豊川市で開催されます。豊川は豊川稲荷として全国的に名を知られた中世宗教都市の形態を今日に残す地方都市です。

豊川の河岸段丘上に広がる本野ヶ原は、かつて稲作に向かない雑木林が生い茂る土地でした。三河木綿と生糸生産の桑畑、決して豊かではないが平和な村々の生活が一変したのは、海軍工廠の建設が決まってからのことです。昭和14年（1939）に僅か400人の従業員で開廠した軍需工場は、戦局の拡大と共にその規模を拡大し、最盛期には従業員5万6千名、総面積330万㎡の東洋一の軍需工場に成長します。

工廠の拡大に伴い、電気・ガス・上下水道、道路・鉄道と次々とインフラ整備が進められ、一大軍事都市へと変貌するのです。隣接する豊橋市も陸軍第15師団の誘致を機に東三河地方の中核都市へと発展する基盤整備が施行されます。アジア太平洋戦争末期には、本土空襲を見据えて遠州灘沿岸には多数の陣地が構築されていきます。

こうした歴史背景を持つ東三河地方には、今日なお当時を物語る戦争遺跡が多数存在します。しかし、その存在は広く人々に知られてはいません。人知れず、劣化と開発の名の下に消えていく戦争の物言わぬ証言者たち。

戦後70余年、戦争体験者は全国民の8%となり、戦争の記憶は風化して、戦争の遺跡や資料を通して戦争の実相を正しく21世紀の次世代に継承することがますます重要になっています。戦争の記憶の証人がヒトからモノへ移り変わらざるを得ない今、残存する戦争遺跡活用の必要性は高まるばかりです。

豊川市では今年6月9日豊川市豊川海軍工廠平和公園が開園します。また、ピースあいちによる草の根の継承活動、「愛知・名古屋 戦争に関する資料館」の開設など、民間・行政で戦争の記憶を継承する新たな拠点が開設されました。

今の世の中の風潮が、第2次世界大戦に向かった頃に似ているという戦争体験者の声もあります。国際紛争の当事者として巻き込まれる可能性も高まっているとする意見もあります。今こそ、近代日本が歩んできた歴史を真摯に学び、その教訓を活かす時代だと考えます。

戦後73年、かろうじて現存する貴重な戦争の記録として、戦争遺跡を有効に活用することが急がれます。ヒトからモノへ世代を超えて語り継ぐ戦争の実相。その語り継ぎのシステムが構築されるまで残存する戦争遺跡は朽ち果てつつあるその姿を私たちの前にさらしながら待っています。

第22回戦争遺跡保存全国シンポジウム愛知豊川大会が、戦争遺跡の保存の現状や課題を明らかにし、相互交流を深めさらに発展させることができるよう皆様の参加を願っています。

2. 開催日と会場

豊川市勤労福祉会館

〒442-0878 愛知県豊川市新道町1丁目1-3

☎ 0533-84-6515

3. 会場への交通案内

□ 公共交通機関なら

豊橋駅から

- ① JR 飯田線豊川駅下車 → 徒歩1分
→ 名鉄豊川線豊川稲荷駅乗車 →
諏訪町駅下車(西口) → 徒歩5分
- ② 名鉄本線新岐阜行(快速特急以外)
→ 国府駅 → 名鉄豊川線に乗換 →
諏訪町駅下車(西口) → 徒歩5分
- ③ 豊橋鉄道バス6番乗場(豊川線) → 心道教バス停下車 → 徒歩6分

名古屋駅から

名鉄本線豊橋行(快速特急以外) → 国府駅 → 名鉄豊川線に乗換
→ 諏訪町駅下車(西口) → 徒歩5分

□ 車なら

- 東名高速豊川インターから約15分
- 東名高速音羽蒲郡インターから約25分



4. 日程と内容

日程: 2018年8月18日(土) ~ 20日(月)

会場: 豊川市勤労福祉会館大研修ホール(18日の全体会)

〃 大研修ホール・視聴覚室・第2会議室(19日の分科会と閉会行事)

全体集会:

(1) 2018年8月18日(土) 豊川市勤労福祉会館

① 全体会

12:00 ~ 受付

13:00 ~ 全体集会開会

- ・主催者挨拶(実行委員長)
- ・記念講演 伊藤厚史氏「愛知県の戦争記念碑からみた戦争と国民」
(休憩)
- ・基調報告 出原恵三(戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表)
- ・地域報告 2本程度 15:00 ~ 15:40
- ・閉会挨拶

15:50 ~ 会員総会

16:30 ~ 分科会打ち合わせ(報告者・運営委員)

(17:00 会場閉鎖)

② 全国交流会（豊川市民プラザ）

17:30～ 受付

18:00～ 交流会 会費 5,000 円

(2) 8月19日（日） 分科会、閉会集会 多目的室

08:30 ～ 受付

09:00～15:00 分科会

分科会①：「保存運動の現状と課題」（大研修ホール 1F）

分科会②：「調査の方法と整備技術」（視聴覚室 1F）

分科会③：「平和博物館と次世代への継承」（第2会議室 2F）

15:10～16:00 閉会集会

分科会報告

特別決議 大会アピール

閉会挨拶

(3) 8月20日（月） オプショナルツアー（午前中観光バスにて移動）

Aコース：豊川海軍工廠平和公園と関連施設の見学

09:00 豊川市勤労福祉会館横出発 豊川市勤労福祉会館横着 11:30 分

Bコース：渥美半島の戦争遺跡の見学（詳細別紙）

09:00 豊川駅東口出発 12:30 豊橋駅東口着

（駅の名前が似ていますのでご注意ください！）

(4) 図書交換

8月18日（土）13:00～16:00 視聴覚室（1F）

8月19日（日）10:00～14:00 研修室（1F）

5. 参加費など

参加費 一般 2,000 円（1日参加は1,000 円） 大学（院）生 1,000 円

（1日参加は500 円）

交流会参加費 5,000 円

昼食弁当代 800 円（8月19日、お茶付き）

オプショナルツアー Aコース 2,000 円 Bコース 2,600 円

定員になり次第締め切ります。両コースとも、最小催行人数 25 人で、この人数に達しない時は8月18日か19日に受付にてツアー代金を返金させていただきます。

申し込み先：Tel & Fax: **0533-85-1199**

報告

総会議案

第30回 日吉台地下壕保存の会
講演会・定期総会

日時：2018年6月9日（土）12:30 開場

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

主催：日吉台地下壕保存の会

※以下の議案はすべて異議なく承認されました。

2017 年度活動報告

- ◇会員数：個人 342 名 交換・寄贈団体：97 団体
- ◇定期総会開催：第 29 回 2017 年 6 月 10 日(土) 来往舎シンポジウムスペース
記念講演『『戦場体験』を受け継ぐということービルマルートの拉孟全滅戦の生存者を
尋ね歩いてー』 講師：遠藤美幸氏(神田外語大学非常勤講師・ビルマ戦史)
- ◇運営委員会開催：2017/4～2018/3 10 回
- ◇会報発行：4 回 130 号(4/27)～133 号(2/28)
- ◇地下壕見学会：2017/4～2018/3 48 回 2,732 人
- ◇ガイド学習会：2017/4～2018/3 4 回 菊名フラット、武蔵小杉中原市民館
見学会ガイドの連絡・学習会。
- ◇第 11 回公開講座：2017 年 4 月 8 日(土)(来往舎シンポジウムスペース)
「戦争の何を『引き継ぐ』のかー慶應義塾における実名と実物の継承の試みー」
講師：都倉武之氏(慶應義塾福澤研究センター准教授)

- ◇第 22 回平和のための戦争展inよこはま：2017 年 6 月 2 日(金)～6 月 4 日(日)
神奈川県民センター 展示参加 日吉台地下壕紹介・日吉地域の空襲被害等

- ◇港北図書館パネル展示会・ミニレクチャー・講演会：
展示会 2017 年 7 月 31 日(月)～8 月 27 日(日)
ミニレクチャー 8 月 13 日(日)、8 月 27 日(日)、
講演会 8 月 6 日(日)『日吉キャンパスにある戦争遺跡』

- ◇第 21 回戦争遺跡保存全国シンポジウム高知大会に参加
2017 年 8 月 19 日(土)～21 日(月)(参加者 300 名)
主催：戦争遺跡保存全国ネットワーク、第 21 回戦争遺跡保存全国シンポジウム
高知大会実行委員会
後援：高知県、高知市、高知市教育委員会、南国市、高知新聞社、朝日新聞高知総局他

- 8/19：全体会
記念講演 公文豪氏「植木枝盛憲法草案と日本国憲法」
基調報告 十菱駿武氏(戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表)
「日本の戦争遺跡の調査研究保存 2017」、
地域報告 伊藤泰正氏(豊川海軍工廠跡地保存をすすめる会)
「豊川海軍工廠跡地保存の経緯」
出原恵三氏(戦争遺跡保存ネットワーク高知)
「高知の戦争遺跡と旧歩兵第 44 連隊の弾薬庫・講堂の保存」

- 8/20：分科会
第一分科会「保存活動の現状と課題」
第二分科会「調査の方法と整備技術」
第三分科会「平和博物館と次世代への継承」
◎日吉台地下壕保存の会(山田譲、喜田美登里)
「日吉台地下壕関連体験者への聞き取りと記憶の継承」
◎東ヨーロッパの戦争遺跡を学ぶ研修旅行団
(十菱駿武氏、都井正博氏、喜田美登里)
「ポーランドのオフスカ地下施設とナチスのリーゼプロジェクト」
- 8/21：フィールドワーク 前浜掩体と耐弾式通信所、旧歩兵第 44 連隊弾薬庫・講堂見学

◇救急救命講習会受講(慶應義塾大学来往舎):2017年11月25日(土)ガイド11名参加

◇戦跡をめぐるバスツアー:2017年11月26日(日) 参加者18名

コース:日吉駅—横須賀軍港を岸壁・埠頭から見学—横須賀美術館内レストラン—
観音崎公園内の火薬庫跡・観音崎砲台群・隧道・弾薬壕・観音崎灯台—
横須賀美術館—解散

◇第25回横浜・川崎平和のための戦争展:2017年12/1(金)～3(日)

「平和のために 今こそ戦争遺跡を考える」慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎

パネル展示会:日吉台地下壕保存の会、登戸研究所保存の会、川崎中原の空襲・戦災を
記録する会、みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会

若者の発表:「15歳の戦争～陸軍登戸研究所と謀略戦」

「日吉における戦争遺跡の活用についての考察」

講演:毎日新聞学芸部記者 栗原俊雄氏 「一年中8月ジャーナリズム」

主催4団体による各活動状況報告

◇港北区地域のチカラ応援事業

公開提案会 2017年4月22日(土) 港北区役所4階1・2号会議室

中間報告会 2017年10月7日(土) 港北区役所4階1・2号会議室

最終報告会 2018年3月17日(土) 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎

2017年度 決算報告

(単位 円)

費 目	2017年度予算	2017年度決算	備 考
【収入の部】			
会費	300,000	339,230	245名
見学会資料代	500,000	618,810	内訳別項
図書等頒布	100,000	30,400	
寄付金等	0	43,875	
港北区補助金	0	72,000	港北区地域のチカラ応援事業
繰越金	392,237	392,237	
計	1,292,237	1,496,552	
【支出の部】			
運営費	150,000	180,321	各種会合・打ち合せ等
事務費	140,000	135,417	事務用品費等
印刷費	110,000	86,404	会報・資料等
通信費	250,000	199,896	会報送料等
図書資料費	110,000	21,870	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	139,040	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	80,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	0	
予備費	152,237	0	
小計		842,948	
差引残高		653,604	次年度繰越金
計	1,292,237	1,496,552	

見学会開催費用内訳

収入の部	支出の部	
見学会費用	891,530	見学者保険料 48,720
		案内経費 224,000
		※資料作成費 618,810
合計	891,530	合計 891,530

以上の通り報告します。

2018年5月11日

日吉台地下壕保存の会

会 計 亀岡 敦子

この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子

会計監査 山口 園子

◇ガイド養成講座:

第11期 2017/1～5
修了者4名、

第12期 2018/1～5
修了者5名

※2018年3月10日(第12期3回目)には、「東京航空計器学徒勤労動員と横浜大空襲の思い出」というテーマで、元神奈川女子師範学校生の鈴木京子さんより、戦争体験を話していただきました。

2018年度予算 (単位 円)

費 目	2018 年度予算	備 考
【収入の部】		
会費	300,000	
見学会資料代	500,000	
図書等頒布	100,000	
寄付金等	0	
繰越金	653,604	
合計	1,553,604	
【支出の部】		
運営費	150,000	各種会合・打ち合わせ等
事務費	140,000	事務用品費等
印刷費	110,000	会報・資料等
通信費	270,000	会報送料等
図書資料費	110,000	書籍・資料等
交流・交通費	140,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	460,000	見学用冊子 5,000 部
予備費	93,604	
合計	1,553,604	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。

2018 年 6 月 9 日

日吉台地下壕保存の会運営委員会

2018 年度日吉台地下壕保存の会

運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問

会 長 阿久沢 武史

副会長 亀岡 敦子

運営委員 石橋 星志

岡上 そう

木村 航

佐藤 宗達

中沢 正子

茂呂 秀宏

渡辺 清

喜田 美登里

上野 美代子

岡本 秀樹

小山 信雄

鈴木 清俊

福岡 誠

山田 譲

羽田 功

遠藤 美幸

岡本 雅之

櫻井 準也

谷藤 基夫

宮本 順子

山田 淑子

会計監査 熊谷 紀子

顧 問 鮫島 重俊

山口 園子

東郷 秀光

2018年度 活動方針

日吉台地下壕保存の会は、1989年4月に慶應義塾の教職員と地域住民の有志約100名で発足し、今年で29年目を迎えました。今回の総会は30回目となります。私たちは今年を節目の年と位置づけ、活動の原点をあらためて見つめていきたいと考えます。

日吉台地下壕に関する本格的な調査と研究は、慶應義塾高校の生徒による「地底研究会」に端を発しています。地下壕に関心を持つ生徒が自主的に集まり、昭和44年度（1969年）の文化祭に参加し、その研究成果を『わが足の下』という冊子にまとめました。それから50年近く経過し、昨年ようやく当時のメンバーに会うことができました。私たちの会の源流が高校生の知的関心と好奇心にあったということを、あらためて確認する機会となりました。

ここ数年、一般向けの見学会の他に小中高の学校単位での見学会をガイドする回数が増えています。慶應高校の定例見学会も定着し、昨年は慶應志木高校や慶應湘南藤沢高校など、他の一貫教育校の見学会もガイドしました。地下壕の勤務体験者への聞き取りを中心に、戦場や空襲の体験を聞く機会も重ねてきました。今年はその記録を冊子にまとめ、資料集を刊行する予定です。次代を担う若者たちのためにも、体験者の記憶を文字として残す作業は、いま私たちがやらなければならない責務のひとつと考えます。

今年も港北図書館でのパネル展示や講演会、「川崎・横浜平和のための戦争展」などを開催し、地域社会に積極的に発信します。横浜市港北区の「地域のチカラ応援事業」にも継続して参加します。講演会や公開講座などを通して最先端の知見にふれ、私たち自身が積極的に学ぶ機会も作ります。私たちは何よりも地域社会に開かれた会でありたいと考えています。

以上を踏まえ、2018年度の活動として、以下の方針を提案します。

活動方針

- 文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
- 慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
- 小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
- 戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
- 日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会を開催し、運営する。



日吉台地下壕保存の会 創立30周年記念 2018年6月9日

○川崎・横浜平和のための戦争展を開催する。

○神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。

○日吉台地下壕の学術調査・研究を深める。

○運営委員会の活動をより一層充実させる。

7 文化

2018年(平成30年)6月21日 木曜

神奈川新聞

慶大白井名誉教授

横浜で講演

大学の戦争責任について研究を続ける慶応大の白井厚名誉教授の講演会が、横浜市港北区の同大日吉キャンパスで開かれた。国際情勢を客観的に判断すべき大学が戦時中、無批判に軍部に協力した責任は「極めて大きかった」と説いた。

1930年生まれ、白井は「15歳で敗戦を経験し、軍国教育に染まっていた自分が大きく変わった」と振り返った。慶大に入学し、歴史学の教授に問うたという。「戦時中は天皇神話を教えたのか」。答えは、憲兵や警官の監視を理由に「なるべく触れないようにしていた」。翼賛でも抵抗でもない「逃げ」だった。

白井は社会思想史を専門とする一方、大学の戦没者追悼も研究する。海外に比べ、日本には戦争に動員され亡くなった先輩を悼む碑などが少ない、との問題意識からだ。90年代初めから調査を重ね、慶大の学生や卒業生、教職員ら2千人超の戦没者名簿を編んだ。

「この碑を見て動けなくなった」と挙げたのは、高知市にある「戦死せる教え見よ」の碑。中学教師だった竹本源治が教え子を戦地に送った反省をつづった詩で「お互いにだまされていた」の言訳がなんでできよう」と一節にある。

竹本の痛烈な悔恨に比べ、真理を探究すべき大学は「。日

「大学の戦争責任」問う

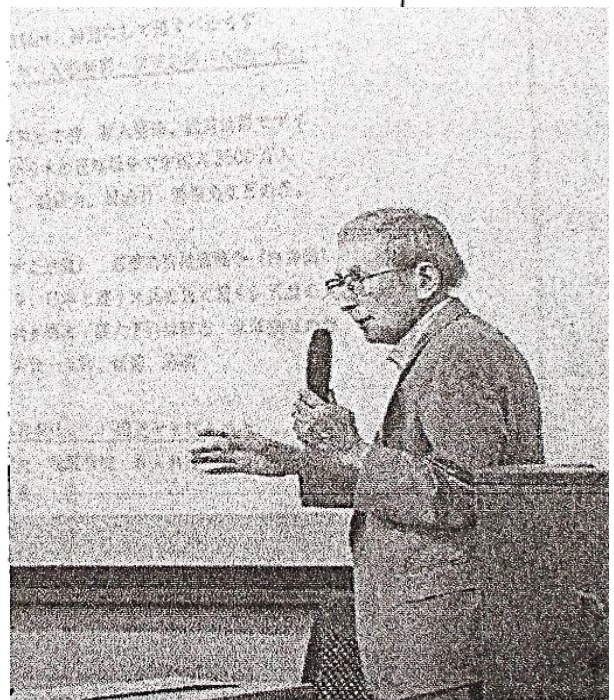
本を外部から見ると、まれなる機会を持った人々の責任は、極めて大きかった。言論統制があったとはいえ、批判精神を放棄した「不作為の責任」を負うと白井は位置付ける。

一方で「慶大左翼組織図表」とある39年の資料を示し、監視の厳しさも説明した。左翼思想に傾倒しているとされる数十人の氏名、所属などを特高警察が記した相関図だ。大学当局では軍人が幹部職に就いた例もある。

り、内外からの厳しい統制があった。

白井が講演で注意を喚起したのは、「学徒出陣」の語に潜む、実態と裏腹の美しさだ。「本にしおりを挟み、敵を倒し、悠々と帰還して次のページを繰る。そんな印象が広まっている」

講演会は同キャンパス地下に残る旧海軍地下壕の保存に取り組む市民団体「日吉台地下壕保存の会」が9日に開催。約70人が耳を傾けた。(斎藤 大起)



真理の探究を放棄した大学の「戦争責任」を問うた白井厚名誉教授

＝慶大日吉キャンパス

*「神奈川新聞と戦争」は休みました。

報告

「大学と戦争」か・ら・思・う・こ・と・ を聴いて

運営委員 小山信雄

6月9日(土)の記念講演では、白井厚慶應義塾大学名誉教授よりお話し頂きました。15歳で敗戦を経験されましたが、ご自身の近現代史に始まり、「真理を探究すべき高等教育機関としての大学」と「戦争のための兵の集団である軍隊」との関りについてを中心に、様々な興味深いお話で、質疑応答も含めた2時間はあっという間に過ぎたように感じました。主な論点と感想を以下述べます。

○「一身にして二生を経(ふ)る」:

江戸時代の門閥(封建)体制と、明治維新後の文明社会の2つの時代を経験した福澤諭吉の言葉です。ご自身も世界大恐慌(1930)の時代に生まれ、軍国主義の時代を体験し、戦後の民主主義・自由主義の時代も体験。「様々な生活を体験・比較することは、その後の人生を豊かにすることが出来るという働きがある」。戦前の教えは皇国史観と軍国主義。神勅・神のみことのりを徹底して教えられた。自分は軍国少年だったが、敗戦後直ぐに変わった。

○「必敗の自他爆戦争」:

あの戦争で、日本軍人・軍属230万(内、60%が餓・病死)、民間人80万人(計310万人以上)が命を落としたばかりでなく、この10倍近くのアジア人が亡くなっており、無関係の住民達も大量に殺傷した自他爆戦争だったと言わねばならない。経済力・補給力・情報力等差は歴然としていたが日本は戦争を進めた。あらゆるものも権力を持てば、みな嘘をつく。政府もマスコミ(新聞、ラジオ)も、今の企業もしかり。1名の捕虜の事実をひた隠した「九軍神」の美談を連日持ち上げ、「玉砕」「学徒出陣」等の美名の下に、多くの日本人を激戦地に送り込んだ。敗戦を迎え、天皇の人間宣言に驚き、占領軍としてやって来た米軍のあまりに日本軍人とかけ離れた姿(肩を抱き合う上官と下士官、女性軍人の格好良さ等)にショックを受ける。米軍のカマボコ兵舎を借りて学業をすることになったが、「雨が降ると、ダダダ・・と大きな音で何を学んだか分からないような状況だったが、今は本日のこのような素晴らしい教室で学生は勉強ができるようになった。ほんとうに良い世の中になった・・」。

○「大学における虚と実」:

2000年8月の高知県での戦争遺跡保存全国大会の時に、市内の公園の石碑に思わず立ちすくみ、大きなショックを受けた。

逝いて還らぬ教え児よ
私の手は血まみれだ 君を括った
その綱の端を私も持っていた
しかも人の子の師の名において
嗚呼!

「お互いにだまされていた」の
言訳がなんでできよう

慙愧 悔恨 懺悔を重ねても
それがなんの償いになろう

逝った君はもう還らない
今ぞ私は汚濁の手をすすぎ

涙を払って 君の墓標に誓う

「繰り返さぬぞ絶対に！」

(作者: 中学校教師 竹本源治)



講演される白井厚名誉教授

大学では、軍人の教授や学長まで出現するようになり、学生思想、特に反戦思想の取り締まりが強化された。「如何に大学に多くの警察官が入っていたか」と言うことで「慶大左翼組織図表(特高月報14年4月分)」を紹介。具体的学生の名前や学年などが記されていた。

東洋で一番早く作られた学生新聞である「三田新聞」のゼミ室には特高警察が必ず一人入っており、内容について細かくチェックしていた。言論機関が弾圧されると、左翼系と視られている学者は書く場所が無くなってしまうので、学生新聞への掲載もあった。授業中には教室の後ろには目つきの悪い人間が教授の戦争に対する考えや学生への発言に目を光らせる等、弾圧は強化される中、「学徒出陣」も決まり、大学は「真理の探究か権力への奉仕か」を突き付けられていた。「マルサスの人口論」を持っていた学生に対し「マルクスの本を所持している」という嫌疑で、警察に捕まえられた等といった話はいくらかもあった。

慶應義塾の小泉信三塾長は、戦争に対して最も前のめりであり、「学生は学問が大事などと言っている時代ではない。学問がしたかったら、戦争に行つて、勝つて、帰つて来てからゆっくり学問すべき。学問があるから戦争に行かないなど、とんでもない話だ」と戦争に積極的に協力した。塾長になってからも多忙であるにも関わらず、講義の継続や学生達との対話を重視して来た人で、国際的で視野も大変広い。授業中に「社会思想史」を始めて導入した教授でもあり、全体主義、アナキズム、フェミニズム等も学生に紹介。軍部から睨まれる一方、「右翼の頭目でもある小泉さん」は捕まえる訳にも行かなかった。軍部の大学に対する圧力・統制が強まる中、教練反対運動も盛り上がったが、そのリーダー格である野呂栄太郎(慶大生。敢然と権力と闘つて権力によって殺された。最も優れた経済学者)が大好きで、特高から目をつけられていた彼を匿おうとのそぶりさえ見せた。野坂参三(慶大生、後に日本共産党の幹部)に対しては、「一晩のみ共産党宣言の英訳を貸してあげる」と言つて、野坂を仰天させたこともあった。

世の中には学問する時期も機会もお金もない人が沢山いる。彼らには判断する材料が非常に少ない。新聞はうそばかり。ならば先生?先生は戦争協力に奔走。「今の世界の状況はこうなんだ。歴史はどう動くのか?」等僅かにでも知らせることが出来ないかと考える時、一つの手段がある。それは社会主義(マルキシズム)。その立場で調べてみる必要がある。賛美されてきた資本主義の結果は「道徳の崩壊」以外の何物でもない。社会主義は種々批判あれど、資本主義以外を学ぶことで歴史の法則性のようなものが浮かび上がり、「こんなことをやっていたら、その結果どうなるのか?」を人々は考えるようになる。そこで、こうしたことを専門に勉強している人、語学堪能で留学経験までして外人といろいろ話し、日本のやり方を外部から観察する稀なる機会を持つ人々の責任は非常に重かったと考える。

大学というものは、ある意味では権威者であり、権力は嘘をつく、欺く処は抜けきれない。従い、先生のいう事を鵜呑みにしてはいけない。偉そうなひとは眉唾。むしろ権力を持っていない人が言うことがほんとかもしれない。

○「感想」:戦争と大学の関わり合いについて、多くの具体的なお話を聴き、少し理解を深めることが出来ました。特に小泉塾長のエピソードの中から、あの戦争の本質の一部が垣間見えたような気がします。「慶大左翼組織図表」まで作つて「左翼分子」を徹底的に詳細に調べ上げ、神経質なまでに目を光らせていた特高警察があった一方、戦争協力に最も熱心で右翼とも言われながら、社会思想にも精通し、初めて授業にも採り入れ、アナキズムまで学生に紹介していた小泉教授(塾長)の博識さとしたたかさを知り、とても感銘を受けました。共産党員であることを重々承知の上で、野坂参三に共産党宣言の英訳を貸したエピソードには人間の器の大きさを感じます。それに引き換え、共産主義をかくも敵視・取り締まっていたにも関わらず、敗戦まじかまでソ連への終戦仲介交渉に期待を寄せていた軍部の支離滅裂さには、怒りを通り越して呆れるばかりです。

報告

公開講座を聞いて

運営委員 佐藤 宗達

第12回地下壕保存の会公開講座 日本の戦争遺跡の調査研究と保存運動—神奈川県を中心—

十菱駿武 山梨学院大学客員教授・戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表

於：2018年4月14日(土) 慶應義塾大学日吉キャンパス
来往舎シンポジウムスペース

32 ページのレジュメを用意されて全国の戦争遺跡の紹介から始まり神奈川県の戦争遺跡の紹介がなされた。共同代表をされている戦争遺跡保存全国ネットワークの調査による「戦争遺跡 指定・登録文化財一覧(2017年7月現在)」の紹介があり総数273件を数える。そして神奈川県の戦争遺跡の特徴については遺跡だけでなく県下に50回にわたる空襲があり、日本軍の本土決戦準備、連合軍のコロネット作戦が相模湾を焦点とした事をあげられ、レジュメに沿って戦争遺跡の紹介・説明がなされた。「二宮町」本土決戦に備えて相模湾周辺には陣地が構築された。先生はご自身で現地を調査され、戦時下の二宮を記録する会のメンバーにも会われてお話をお聞きしているとのこと。二宮町に現存する戦時下につくられた陣地・防空壕・壕等の一覧には50ヶ所がリストアップされています。我々は二宮駅前のガラスのウサギ像しか知りません、認識不足を痛感しました。「横須賀軍港、海軍航空技術廠と貝山地下壕」三浦半島・横須賀周辺の地図には軍事施設がビッシリ記載されており。我々はせいぜい横須賀軍港、猿島あたりしか知らず、もっと足を運ばなければと思いました。「相模原・愛川の防空監視哨」防空監視哨はほとんど知られてなく認識を新たにしました。

「日吉台連合艦隊司令部壕、海軍航空本部・軍令第3部地下壕、艦政本部地下壕」蝮谷の航空本部地下壕の出入り口発掘状況の写真などを参照しながら地下壕群の紹介をされ、これに関連して海軍蟹ヶ谷通信隊地下壕も紹介されました。また空襲・戦災の記録を説明されましたが8月15日の小田原空襲のお話がありました。二都市を空襲したB29編隊のうちの機がマリアナ諸島へ帰還する途中に小田原を空襲したようで米軍の記録には一切ないとのこと。消失した家屋は約400軒、死者は12名とのこと。記録にない空襲・戦災、多くの方に知ってほしい事実です。2時間にわたる熱のこもったお話をお聞きすることができました。



講演される十菱氏

報告

第12期ガイド養成講座終了しました

運営委員 佐藤宗達

今期は1月13日開講、6名の方が受講、5月12日に終了しました。第二回講座は3月10日にお二人の方の戦争体験をお聞きしました。元暗号兵の栗原啓二氏からは当時の地下壕の様子や軍隊生活について、元住吉・東京航空計器に勤労働員されていた鈴木京子さん(当時神奈川女子師範学校生)の工場での勤務や空襲体験談、5月29日の横浜大空襲の体験談をお聞きしました。また同窓生の方々からも空襲の体験談をお聞きする事ができました。(鈴木さんのお話は会報134号に掲載しておりますのでご参照ください)。第三回講座は4月7日にフィールドワークで日吉台地下壕群を見て廻りました。艦政本部地下壕の説明はチャペル付近から「あの丘の地下です」と云うだけですが、実際に出入り口を見ることで実感がわきました。第四回は5月12日に行われ「見学会ガイドの手引—各ガイドポイントの説明骨子—」を基にガイドの要領、注意点、時間配分などを確認しました。喜田さんからは見学会の申し込み手順など、岡本雅之さんからはガイドの役割分担について説明がありました。その後フ

リーディスカッション、茂呂さんのまとめのお話があり、最後に亀岡副会長より受講者に終了証が手渡され養成講座は終了しました。なお7月7日に拡大ガイド学習会を開催してガイドの実際をレビュー・検証する予定です。

連載

地下壕設備アレコレ【22】

地下壕出入口の「爆弾防護施設」の資料がありました

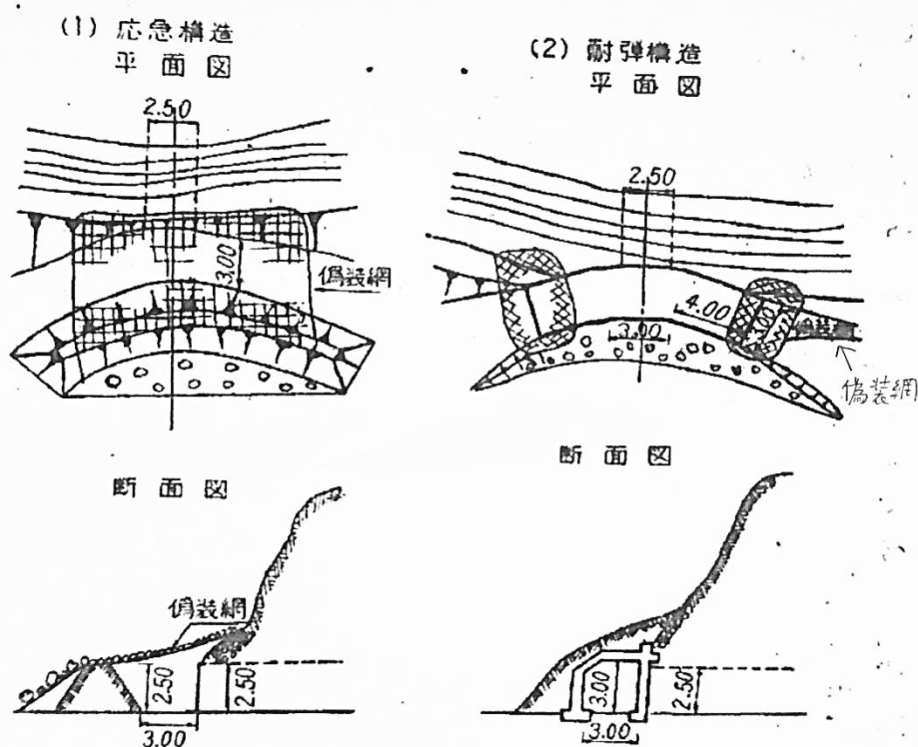
運営委員 山田譲

連載【20】で元・第203設営隊指揮官佐用泰司技術大尉が書いた『基地設営戦の全貌——太平洋戦争海軍築城の真相と反省』（森茂氏との共著、鹿島建設技術研究所出版部・発行）を紹介しましたが、この本には海軍地下施設の作り方がくわしく書かれています。新たにわかったことがいろいろありますが、今回は地下壕出入口の爆弾対策について紹介いたします。

日吉の地下壕の出入口は、T字型になっている所が多く見られます。またマムシ谷の海軍航空本部等の地下壕の出入口はストレートに外に向かっていますが、2009年の発掘調査で出入口の左右にコンクリート敷きの通路面が発見されました。この二つの形と一致する図面が、この佐用氏の本に載っていました。「隧道出入口等の防護」の項に、「隧道の出入口及びその付近は砲爆撃に対し最弱点部分であるから、……弾片及び爆風防御のため出入口前面には必ず防弾壁を築造した。応急的には出入口の前方3m乃至5m距てて高さ2m50乃至3m、長さ13mの土塁を構築」と書かれています。そして「隧道出入口の防護施設」と題された図面（添付図参照）には、「(1) 応急構造」と「(2) 耐弾構造」の2種類の図があり、それぞれ平面図と断面図が描かれています。

この「耐弾構造」の方は、地下壕通路幅2.5m、高さ2.5mに対して、幅3m、高さ3m、長さ4mのコンクリート製出入口を左右に設け、この全体の形は直角のT字型でなく、少しY字型に近い開き方をしています。これは連合艦隊司令部地下壕の南東側、足立園芸さんの側の出入口そっくりです。ただし佐用氏の本の図では、このT字型コンクリート製出入口には覆土がかけられており、また左右の出入口上部には「偽装網」が掛けられて出入口を隠すようになっています。日吉キャンパス北側の海軍人事局地下壕のT字型出入口には、この図同様の覆土があり、「偽装網」以外は全く同じと言っていいでしょう。

他方、「応急構造」の図を見ると、地下壕出入口は幅2.5m、高さ2.5mで、その前方3mのところ、高さ2.5mの土塁がつくられています。この土塁頂部と地下壕上部の傾斜地にかけて、大きな「偽装網」が掛けられています。この「応急構造」でも、左右に広がる通路は少しY字型に近いT字型です。マムシ谷の発掘調査で出てきた、幅約3mのコンクリート通路面とそっくりです。



第33圖 隧道出入口の防護施設

このことからすると、マムシ谷の航空本部等地下壕の出入口の先には、発掘調査ではわからなかった土塁が築かれていたのではないかと思います。そう考えると、ここの爆撃に対する防護の仕方がよくわかる気がします。

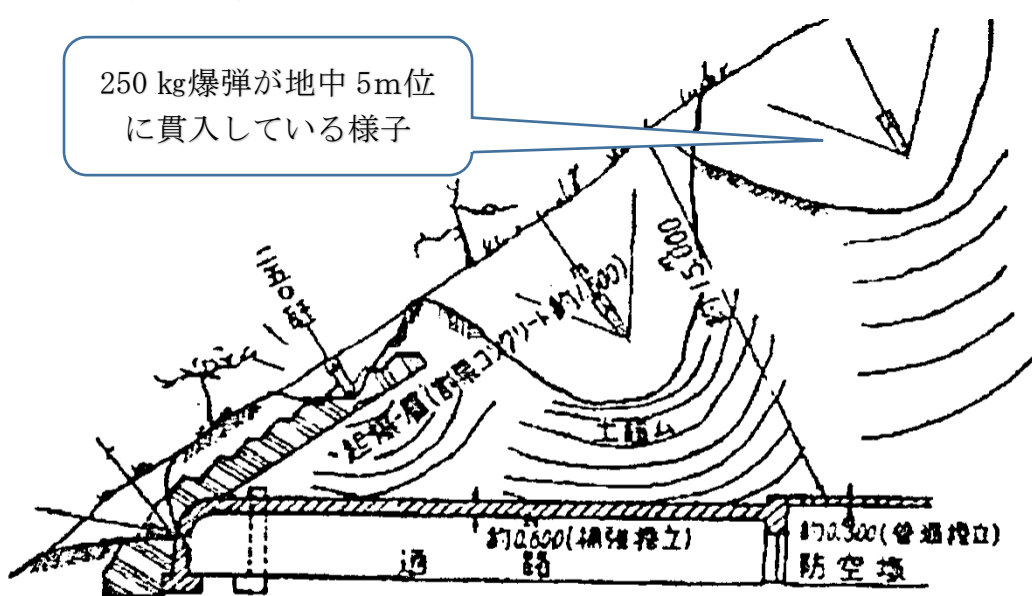
また、この本には「出入口は人員機械の搬出入に支障のない限り、なるべく小さくし」とも書かれています。そしてこの部分は通路の高さも奥の方より低くなっています。通路の幅も当然狭くなっているはずです。またこの図には、250 kg爆弾が地中5m位に貫入している様子が描かれていて、こういう想定で耐弾防護を考えていたということです。本文中には、「築城隧道は……充分なる覆土を有することが必要で、概ね粘土質の場合15m以上、岩石の場合6m以上を必要とし」と書かれています。また「隧道相互の間隔は、……同一爆弾により破壊されない程度にて20m以上とした。」とも書かれています。

出入口近くの地下通路を狭くするという構造は、航空本部等地下壕ではマムシ谷の側も反対の南東側も、各出入口ともに、その通りになっています。また「隧道」の「勾配は換気並に排水上五十分の一前後」と書かれています。「勾配五十分の一」とは、50m進むと1m下がる(または上がる)ということで、今の一般的表記では「100分の2の勾配」となります。これも連合艦隊司令部地下壕の実際の勾配と一致します。

ところで、ここで紹介した佐用氏の記述の多くは、「地下工場の建設」という項目で書かれています。とはいえ日本国内での地下施設の築造ということでは、日吉の海軍地下壕の「築城」と同じ条件・目的ですので、日吉で海軍設営隊がやっていたこととピッタリ重なると思います。

この本で佐用氏は「第一部 太平洋戦争築城施設戦の概観」と題して、先に紹介したことを書いています。そのなかで氏は、「昭和十七年から同十八年に亘るラバウルの戦訓は、施設全般の地下移転を促し」とした上で、「遂にマリアナの守備も破れ、米軍は比島に来攻するに至り、いよいよ内地諸工場の防備強化は緊急を要する事態となった」と書いています。しかしその地下工場は、何の役にも立つことなく敗戦を迎えました。私はここを読むと敗戦必至のボロ負けの戦局と、地下壕・地下工場築造工事が、まさに裏表の関係だったことを強く感じます。いったい何のための穴掘りだったのか？ 動員された兵士・作業員の汗と血は何のためだったのか？ 戦争の愚かしさを思わざるをえません。

《付記》 日吉の連合艦隊司令部に勤務した元暗号兵の新井安吉さんにいただいた手記には、地下壕出入口について「入口正面は爆風除けとかで土のうが堆く積まれており、出入



は横の部分となっておりました。そのやゝ右下にカマボコ兵舎があり…」と書かれています。この「爆風除け」の「土囊(のう)」というのは、佐用氏が書いている「応急構造」の「土塁」とピッタリ一致します。新井さんの勤務した暗号室から、現在の足立園芸さんの所に出る出入口がそうなっていたわけです。

第34図 隧道出入口附近の耐弾化要領

お知らせ**港北図書館でパネル展&講演会を開催します！**

運営委員 小山信雄

7月29日(日)から8月26日(日)迄、港北図書館のご協力を頂き、菊名の横浜市港北図書館1階の“港北まちの情報コーナー”にて“日吉台地下壕パネル展”を開催します。日吉の大学キャンパスに残る貴重な戦争遺跡について、少しでも多くの方々に知って頂き、戦争や平和について見つめ直す一助になればと願っています。

報告**「第23回2018 平和のための戦争展 in よこはま」****5月29日・横浜大空襲から73年**

6月1日から3日まで、横浜駅西口のかながわ県民センターで開催。1階の展示会場は横浜市史資料室からの横浜大空襲資料他、約500点の展示とビデオ上映、2階ホールでは2日・3日に特別企画の講演・朗読劇等が行われた。若い人の参加も多く、受付の案内パンフレットも品切れになった。参加者からの感想を頂いた。

実行委員 喜田美登里

○感動の声・声・声 飛田久男さん

23回目を迎えた「2108 平和のための戦争展 in よこはま」が6月1日(金)から3日(日)まで、横浜駅西口の県民センターで開催され、参加者は3日間で2000人を超えました。

今年は大人たちに混ざって、中学生や高校生、大学生の参加も目立ちました。6月2日(土)午後の特別企画は260席の2階ホールが満席となる盛況で、米寿を迎えた実行委員長の小山内美江子さんの「希望の灯を消さないために」と題した挨拶と講演に続いて登場した日吉台中学校演劇部の朗読劇「焼け跡に生きる一戦争孤児の記録」が大きな感動を呼びました。しかも演じたのが入学して2カ月もたたない1年生の皆さんと聞いて、子どもたちの成長力に驚きの声が溢れました。続いて「キャンパスから見える戦争」(グローカリー横浜市大グループ)を挟んで、女優の五大路子さんと夢座の皆さんの朗読劇「真昼の夕焼け」が演じられ、プロの芸に満場の拍手が鳴りやみませんでした。

3日(日)の特別企画では「敵を作らない日本に」(小沼通二慶大名誉教授)、「平和を紡ぐピースボート」(ヒバクシャ国際署名スタッフ鈴木慧南さん)、「草の根の運動が歴史を動かした」(国連総会参加・バチカンでローマ法王に訴えた横浜原爆被災者の会会長和田征子さん)の講演・報告に続き、ノーベル平和賞授賞式の「サーロー節子さんの演説」を女優の奥山真佐子さんが臨場感あふれる朗読で披露、喝さいの拍手を浴びました。

今年の「平和のための戦争展」は「出演者の講演や朗読がコラボしていた」「プロの芸はスゴイと感じた」「観客とつながれた感じがする」など30を超える団体の実行委員からもしっかりと手ごたえや喜びが伝わってきた充実した戦争展でした。

○日吉台中学校演劇部の朗読劇 赤瀬福子さん

「トラックの荷台に乗せられた30人もの戦争孤児たちが、夜の山奥に運ばれ、山中に棄てられた…」会場を震撼させた中学生たちの朗読の数々は、戦後73年を迎えようとする中、初めて知る話でした。

国策として学童疎開をさせられ、ようやく終戦後に親元へ戻ると、かの地は大空襲によって焼け野原と化し、親兄弟を失った児童は何千何万といたといわれています。この子どもたちの心を救う手はなかったのでしょうか？国による補償は軍人の遺族にはあっても、民間人には無いという事実。国の機関や社会から浮浪児として扱われ、学校にも通えず生きてきた惨状を、戦争孤児でもあった金田茉莉さんが当事者を訪ね歩き、長いこと記録をとり続けてこられました。この思いを十分に汲みとりながらの日吉台中学校演劇部の朗読は、ひたむきで気高く、近年の「平和のための戦争展 in よこはま」の中でも秀逸だったと思われます。この企画が広がることを願ってやみません。戦争を知らない子どもたちが自分のこととしても置き換えられる機会に。

活動の記録 2018年4月～6月

- 4/28(土) 定例見学会 35名
 4/29(日) ガイド学習会(菊名フラット)
 5/1(火) 地下壕見学会 慶応義塾大学理工学部 31名
 5/7(月) 運営委員会(来往舎205号室)
 5/9(水) 定例見学会 50名 地下壕見学会 栗東西中学校3年生修学旅行 72名
 5/11(金) 平和のための戦争展川崎・横浜実行委員会(法政第二高校教育研究所)
 5/12(土) ガイド養成講座第4回(来往舎中会議室)
 5/14(月) 会報134号発送(来往舎205号室)
 5/26(土) 定例見学会 34名
 5/30(水) 慶応義塾高校地下壕見学会 8名
 5/31(木)～6/3(日) 「第23回 平和のための戦争展 in よこはま 5月29日・横浜大空襲から73年」(横浜駅西口かながわ県民センター)
 5/31 展示準備 6/1～6/3 展示・講演・朗読劇・報告
 6/4(月) 日吉地区センター主催講座「わが街再発見日吉台地下壕」36名
 (日吉地区センター) 運営委員会(来往舎205号室)
 6/9(土) 2018年度総会・記念講演白井厚氏(来往舎シンポジウムスペース)
 6/11(月) 地下壕見学会 日吉地区センター主催講座 36名
 6/13(水) 定例見学会 56名
 6/15(金) 冊子「戦争遺跡を歩く 日吉」第九版5千部印刷
 6/18(月) 平和のための戦争展 in よこはま 実行委員会
 (かながわ県民センター)
 6/23(土) 定例見学会 73名
 7/1(日) ガイド学習会(菊名フラット)
 7/2(月) 運営委員会(来往舎205号室)
 7/4(水) 平和のための戦争展川崎・横浜実行委員会(法政第二高校教育研究所)

★地下壕の定例見学会は予約申込が必要です。

- ・原則として毎月2回実施(第2水曜日10時～12時30分・第4土曜日13時～15時30分)
 所要時間2時間半
- ・夏休み見学会 7月21日(土)・8月1日(水)・8月4日(土) ・定例見学会8月8日(水)
 定例8月25日(土)は実施しません。・現在、お申込が定員を超えた日もあります。

★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで Tel/Fax 045-562-0443 喜田(午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 Tel 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 Tel 045-562-0443
 ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
 発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921
 代表 阿久沢 武史 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
 日吉台地下壕保存の会運営委員会